

韓国人学習者の普通体の話しことばにおけるノダ*

— 丁寧体の話しことばとの比較を中心に —

梁 乃 允**

ynaeyun@hanmail.net

李 吉 鎔***

ih_kilyong@cau.ac.kr

目 次

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 3.1 ノダ付加文の使用率 |
| 2. 分析資料の概要および扱い方 | 3.2 ノダ使用上の特徴 |
| 2.1 分析資料の概要 | 4. 日本語母語話者の普通体におけるノダ |
| 2.2 分析資料の扱い方 | の使用実態 |
| 3. 学習者の普通体におけるノダの使用実態 | 5. おわりに |

Key word : 中間言語(interlanguage), 普通体(plain form), 丁寧体(polite form), ノダ(*noda*)

1. はじめに

ノダは日本語の世界では日常的に頻繁に用いられるが、学習者にとってはその習得が難しい表現としてしばしば指摘される(野田2001、藤城2010など)。ノダの習得が困難な理由としてはノダ自体に実質的な意味がないため正体がつかみにくいこと、基本的な意味を説明するだけでは十分に理解できないほどの機能の広がりを持つこと、さらにノダの使用を決めるには文

* 本稿は2018年2月に第一著者が中央大学校に提出した博士学位論文の一部に修正・加筆を施したものである。또한 이 논문은 2018년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NRF-2018S1A5B5A07074184)

** 中央大学校アジア文化学部 講師, 社会言語学(第一著者)

*** 中央大学校アジア文化学部 教授, 社会言語学

の意味的な情報とともに文脈や状況から得られる情報が必要であることなどが挙げられる(野田1997)。しかし、学習者にとってノダの習得が難しいことが指摘されているにも関わらず、日本語学においてはノダに関する研究が膨大である一方、学習者が使える形での記述は少ない(庵2013)。

学習者のノダの習得に関する研究についても、主に文法性判断テスト(趙萍2008、趙萍他2009)やアンケート調査(佐々木1998)によって用例を採集し、学習者のノダの習得状況やノダ使用の意識について考察する研究が多い。そんななか、谷守(1996)や塚原(1998)は学習者の談話資料を用いてノダの使用実態の分析を試みた。例えば、谷守(1996)は、研究発表時の発話資料を用いて、「日本語上級習得者」の言語運用の特徴としてノダ(ンデス)の使いすぎや誤用が見られることを指摘する。また、韓国語・英語・中国語の母語話者のOPIデータを文字化したKYコーパスを用いて学習者のノダの使用実態を分析した研究も見られる(坂井2008、宮内2012・2015など)。そのうち宮内(2012、2015)は、KYコーパスのうちの韓国語母語話者の談話を用いてノダの使用実態を分析し、学習後期になるとノダの用法の大部分を習得することや、学習初期には「非用」が多い反面、学習後期には不適切な使用が多く現れることなどを明らかにした。

ところが、これらの研究は学習者の用いるノダに対し、標準日本語における意味・機能の観点から使用実態を分析し、正用か誤用かを判断して誤用が生まれる要因を突きとめようとしたものである。学習者が独自に作り上げる日本語中間言語という立場から使用実態を観察し、なぜそのようにノダを用いるのかという習得のプロセスを解明しようとする視点は欠けているように思われる)。学習者が独自に作り上げる文法規則という観点からノダの使用実態の分析および考察を試みた研究は、管見の限りにおいては李吉鏞(2008、2010、2016)、若生(2010、2011)ほどである。

韓国人学習者の丁寧体と普通体の切替えの習得メカニズムについて分析

-
- 1) 誤用といわれる学習者特有の表現は彼らの工夫の産物である(迫田2012)。したがって、学習者の誤用を単に誤りとして位置づけるのではなく、自らが指向する談話の展開のために工夫をこらして独自の規則を作り上げた結果産出されたものとしてとらえるべきであろう。

を行った李吉鎔(2008、2010、2016)は、一部の学習者にンデスの過剰使用が見られることを明らかにしたうえで、発話文末以外にも連体修飾節とも使われる普通形の利便性を利用し、「普通形+ンデス」という形が自動化されたものとして用いられるという見解を示した。また、若生(2010、2011)も韓国人学習者のンデスの過剰使用を指摘し、その理由として複雑な日本語の丁寧形の体系を単純化しようとする学習者のストラテジーが働いている可能性を示唆した。そんななか梁乃允・李吉鎔(2016、2017)は、これらの先行研究の知見に基づいて学習者の日本語文末表現の習得メカニズムの解明を目的に、学習者の丁寧体の話しことば資料であるKYコーパスを用いて韓国語・英語・中国語母語話者を対象にノダと終助詞を中心として考察を行った。学習者の丁寧体の話しことばにおけるノダ使用上の特徴を簡略にまとめると、次のようである。

- (1)3ヶ国の母語話者ともにモダリティー表現の習得プロセスの早い段階からノダを用いる。
- (2)終助詞は名詞述語文において、ノダは動詞述語文において親和性が認められる。
- (3)英語や中国語の母語話者より韓国語母語話者のほうがノダを多用する。
- (4)学習者の用いるノダは単独で現れるより終助詞と共にセットで現れる傾向がある。

梁乃允・李吉鎔(2016、2017)は韓国語母語話者だけでなく、英語や中国語母語話者までを分析の対象とし、ノダ使用における普遍的な特徴や母語の影響を受ける個別的な特徴などについて考察を行った。ところが、これらの特徴はKYコーパスという丁寧体の話しことばで見られる特徴であり、文のスタイルが異なる場合にも当てはまるとは限らない。李吉鎔(2010)は韓国語を母語とする学習者の談話を分析し、丁寧体の話しことばにはノダが多く現れるが普通体の話しことばにはほとんど出現しないという非対称性をすでに指摘している。文のスタイルが丁寧体の話しことばでない場合に学習者がノダをどのように用いるのか、という使用実態を明らかにするこ

とは学習者のノダ使用のメカニズムを探る手がかりになるであろう。そのため、本稿では韓国人学習者の普通体の話しことば資料を用いてノダの使用実態を綿密に分析し、丁寧体の話しことばでの使用実態と比較・対照する。そうすることで、文のスタイルの違いが学習者のノダの使用に影響するかどうかを検討する²⁾。

以下、§2で本稿で普通体の話しことば資料として用いるSSコーパスの概要と資料の扱い方について概観する。§3ではSSコーパスにおけるノダの使用実態について綿密に分析し、丁寧体の話しことばのKYコーパスでの結果と比較する。そして§4で日本語母語話者の普通体の話しことばをベースラインデータとして用いてノダの使用実態を検討し、SSコーパスでの結果と比較を行う。最後に§5で本稿を通じて考察してきた内容のまとめを行う。

2. 分析資料の概要および扱い方

2.1 分析資料の概要

韓国人学習者の普通体の話しことば資料として、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス・バージョン1.0の考え方を参考にして収集された、学習者4名のカジュアルな談話(全10談話:計388分)を用いる³⁾。便宜上、この談話をSSコーパスと呼ぶ。また、学習者のノダの使用実態が日本語母語話者と違いがあるのかを確かめるため、同じくSSコーパス・

-
- 2) 梁乃允・李吉鎔(2018)では、学習者の丁寧体の書きことば資料の作文対訳DBを用いて学習者のノダの使用様相を分析した。その結果、学習者の書きことばではノダの使用が他のモダリティ表現よりも少ないなど、ノダの多用は認められず、学習者の丁寧体の話しことば資料のKYコーパスで確認できたノダ使用上の特徴も見られなかった。
 - 3) SSコーパス・バージョン1.0は、日本語学習者と日本語母語話者(日本各地の日本語方言話者)のカジュアルスタイルとフォーマルスタイルの切換えの実態を把握するために、実際の談話を録音し収集したものである。本稿では、そのうち韓国語を母語とする4名の日本語学習者の普通体の話しことばを分析の対象とする。同談話は、当時大阪大学大学院に在学中の李吉鎔氏(現中央大学校の教授)が収録した(李吉鎔2005)。

バージョン1.0から東京方言話者の普通体の話しことばをベースラインデータとして用いる。表1に学習者とベースラインデータとなる日本語母語話者の基本情報を示し、表2に談話収録情報を示す。

〈表1〉 学習者と日本語母語話者情報

	KS	YP	HT	JH	YA
年齢	22	28	24-25	28	21
性別	男性	男性	男性	男性	男性
職業	日本語専門学校生	日本語専門学校生	日本語専門学校生	学部研究生	寿司職人
日本居住歴	22-:大阪府	28-:大阪府	24-25:大阪府	24-25:東京都 28-:大阪府	0-:東京都中央区

*「KS・YP・HT・JH」は学習者の、「YA」は日本語母語話者の識別コードである。
(李吉鎔2005:p.20の表1を修正・転載)

〈表2〉 学習者と日本語母語話者の談話収録情報

	KS	YP	HT	JH	YA
第1回目	JC(女)・22歳 2004.06.08収録・ 33分間使用	TC(男)・29歳 2004.06.08収録・ 40分間使用	JC(男)・21歳 2001.05.13収録・ 40分間使用	JC(女)・26歳 2004.02.23収録・ 40分間使用	YC(男)・21歳 2001.07.20収録・ 28分間使用
第2回目	JC(女)・22歳 2004.08.27収録・ 37分間使用	CC(男)・23歳 2004.08.10収録・ 40分間使用	JC(男)・29歳 2004.08.10収録・ 40分間使用	-	-
第3回目	JC(女)・22歳 2004.12.14収録・ 38分間使用	CC(男)・28歳 2004.12.15収録・ 40分間使用	JC(男)・29歳 2004.12.15収録・ 40分間使用	-	-

*JHは話し相手になるような親しい関係の友人がいないため、2・3回目の調査が実施されていない。一方、日本語母語話者のYAはベースラインデータとして一回のみ調査が行われた。
(李吉鎔2005:p.24の表6を修正・転載)

SSコーパスでは学習者4名の日本語運用能力について「KS-YP-HT-JH」の順に高くなっていくことだけが明記されており⁴⁾。本稿にてSSコーパスの

4) 李吉鎔(2005)は、統語面での発達段階の観点と伝達動詞の使用状況の観点に基づいて学習者間の相対的な日本語運用能力を判定しており、使用された複文構造の種類から「KS<YP≤HT<JH」の順に日本語運用能力が高くなると述べている。また、KSは標準的な日本語教育で教えられた通りの形式を複製して使う「学習言語複製期」であ

分析結果と比較を行う丁寧体のKYコーパスのように、初級から超級といったレベル分けは行われていない。ところが、両者をより正確に比較するためには、SSコーパスもKYコーパスのようにレベル判定を行う必要がある。そこで、本稿では学習者の来日以前の学習歴(表3)や、実際の談話データを観察した結果などを基に、KYコーパスの判定基準⁵⁾に従って学習者4人のレベルを任意に判断した。その結果、KSは初級、YPは中級、HTは上級、JHは超級に相当すると考えられる。

〈表3〉 学習者の来日以前の日本語学習歴

	KS	YP	HT	JH
高校	-	1年間、週2時間	3年間、週2時間	-
大学	-	4年間、週6時間	4年間、週3時間	4年間、週5時間
大学院	-	1年間、週6時間	-	1年間、週20時間
日本語学校	6ヶ月、週5時間	1年間、週8時間	2年間、週5時間	1年間、週25時間(日本)
主な学習科目	基礎日本語、日本語文法、会話	日本語文法、時事日本語、会話など	基礎日本語、日本語読解、日本語会話、翻訳練習	日本語全般
丁寧体	学習	学習	学習	学習
普通体	未学習	学習	未学習	学習

(李吉鎔2005:p.21の表2を修正・転載)

なお、普通体のSSコーパスでの分析結果と比較・対照を行う、丁寧体のKYコーパスにおけるノダの使用実態については、梁乃允・李吉鎔(2016、2017)での分析結果を用いる。ただ、梁乃允・李吉鎔(2016、2017)では韓国語・英語・中国語母語話者の3者を分析対象とするが、本稿ではSSコーパス

り、HTおよびJHは独自の規則を築きつつある「独自体系構築期」に当たるとし、YPは「学習言語複製期」から「独自体系構築期」、あるいは「目標言語体系」へと移行する段階にあるとされる(李吉鎔2008・2010)。

- 5) KYコーパスは韓国語・英語・中国語を母語とする日本語学習者それぞれ30人の合計90人によるOPIデータを文字化したものである。なお、各学習者はOPIによるレベル判定基準に基づき、「初級：決まり文句や習い覚えた語句、単語の羅列で最小限のコミュニケーションが行える」、「中級：自分なりに言葉が使え、なじみ深い話題について簡単な質問をしたり、答えたりでき、また簡単な状況や、やり取りに対処できる」、「上級：すべての時間的枠組で叙述、描写ができ、かつ、複雑な状況が処理できる」、「超級：意見の裏付け、仮説構築、具体的・抽象的の話題について議論ができ、そして言語的に不慣れな状況が処理できる」の4つにレベル分けされている(Breiner-Sanders2000、鎌田2006)。

との整合性を合わせるため、3者のうち韓国語母語話者のみを取り出して分析を行うこととする。

2.2 分析資料の扱い方

本稿では基本的に梁乃允・李吉鎔(2016、2017)での資料の扱い方の基準にしたがって普通体のSSコーパスを分析する。詳細は学習者の日本語文末表現の各項目間の有機的な関係に注目しているため、語彙的や統語的、また意味的に的確でなくても、述語文が発話されていれば分析の対象とする(例1)。とりわけ文末表現の項目のうち、ノダと終助詞に焦点を当てて取り上げており、ノダと終助詞が現れない(または現れにくい)環境での発話、例えばあいさつことばなどの決まりきった表現、疑問文(例2)、終助詞的な用法として使用された「と思う」構文、直接引用文などは分析対象から除く。

例1)活用の誤用(KS2⁶⁾)

310JC：面白いのに 野球一。

311KS2：ちょっと 難しくないで あまり 私 好きには ない。【好きではないの意】

例2)疑問文(YP3)

205CC：イサムさん イサムさん イサムさん たぶん いけないと 思う。

206YP3：来ない？

終助詞についてはネ・ヨ・ヨネの3種類のみを分析の対象とする。ネ・ヨ・ヨネの他に大阪方言話者が親の関係において多く用いるナとワの使用が見られるが、本稿では丁寧体のKYコーパスにおけるノダの使用実態を考察した梁乃允・李吉鎔(2016、2017)での分析結果と比較・対照することを目的としているため、ネ・ヨ・ヨネの3つを分析の対象とした梁乃允・李吉鎔(2016、2017)と基準を同じくした。また、ここでは普通体の文末に現れるノダに注目するため、普通体で終わっている文を分析の対象とし、丁寧体で

6) 学習者の識別コードの後の数字は収録調査が何番目に行われたかを表す。

終わっている文は除外する(例3)。

例3)丁寧体で終わっている場合(KS1)

389KS1 : 私が わからない とき おねえ あにーに、質問します。

なお、前述した通りに本稿ではノダと終助詞のシンタグマティックな関係に注目しているため、述語文の類型をノダと終助詞の使用有無によって、Aタイプ(言い切り文、「行キマス」のようなもの)、Bタイプ(終助詞単独付加文、「行キマスヨ」のようなもの)、Cタイプ(ノダ単独付加文、「行ッタンデス」のようなもの)、Dタイプ(ノダと終助詞付加文、「行ッタンデスヨ」のようなもの)の4つに分けて分析を行う。

3. 学習者の普通体におけるノダの使用実態

3.1 ノダ付加文の使用率

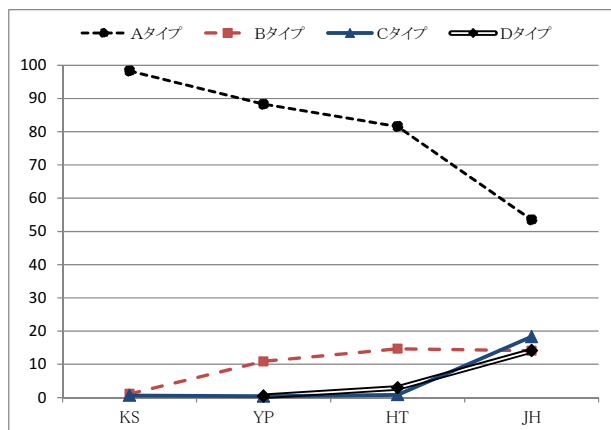
まず普通体における学習者のノダの使用様相を概観するため、表4にSSコーパスでの述語文の類型別使用実態を実数と比率で示す。述語文の類型別の全体的な使用傾向に注目しているため、ここでは学習者ごとに3回実施されている収録調査の結果の合計を産出して分析を行う。

<表4> 学習者の文末表現の類型別使用実態

	KS		YP		HT		JH		平均	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
Aタイプ	172	98.3%	203	88.3%	311	81.6%	37	52.1%	723	84.3%
Bタイプ	2	1.1%	25	10.9%	56	14.7%	10	14.1%	93	10.9%
Cタイプ	1	0.6%	1	0.4%	3	0.8%	13	18.3%	18	2.1%
Dタイプ	-	-	1	0.4%	11	2.9%	11	15.5%	23	2.7%
合計	175		230		381		71		857	

*「合計」は総発話文数を表し、「比率」は総発話数に占める各タイプの比率を表す。

なお、「KS-YP-HT-JH」へと日本語の運用能力が上がるにつれて、文末表現の使用様相がどのように推移するかを、次の図1に示す。



〈図1〉 学習者の述語文類型別の使用率

表4と図1から以下のようなことが分かる。

- (1)学習者全体の平均から見て、非ノダ付加文(Aタイプ+Bタイプ:95.2%)のほうがノダ付加文(Cタイプ+Dタイプ:4.8%)より優勢に用いられている。
- (2)終助詞付加文(Bタイプ+Dタイプ)は、KSからJHへと日本語運用能力が高くなるにつれ、その使用比率も高くなっている。ここで1つ注目を引くのは、日本語運用能力が最も高いJHの場合、終助詞付加文(全体の29.6%)のうち、半分がノダとともに用いられている(Dタイプ、15.5%)ということである。
- (3)学習者ごとに検討すると、KSとYPはノダ付加文がそれぞれ1例と2例であり、ノダの使用がほとんど見られない。一方、HTはノダ付加文の使用が少し増え、JHはノダ付加文が全体の3割以上(33.8%)を占める。日本語運用能力が高くなるにつれ、ノダの使用が徐々に増加していくことがうかがえる。

日本語運用能力が上がるにつれてノダの使用率が高くなるのは、丁寧体のKYコーパスでの傾向と一致するが、全レベルの平均使用率は4.8%に過ぎ

ず、24.1%の使用率を見せるKYコーパスに比べれば、約1/5の水準にとどまる。それは学習者が普通体より丁寧体においてノダを多用する可能性を示唆するものであろう。

ここで、学習者の談話例を取り上げてみよう。次の例4は、HTの談話の一部である。1997年度に韓国を襲った金融危機により、日本への留学を諦めるしかなかった過去の出来事を回想している場面でノダを用いている。注目を引くのは、通常話しことばにおいて用いられるンダの形ではなく、ノダの形でそのまま接続しているところである。この談話はHTが来日してまもない頃に収録を行った1回目の調査に収められているものであり、まだ状況に応じて適切なノ(ン)ダの形を選択するという文法的運用能力の面において過渡期的な段階であると思われる。

例4)(HT1)

679HT1：思ったんだけど、 経済が 悪いから、 (JC：うん) あの 父に
話すのは できなかったのだ。

例5はノダの使用の多いJHの談話の一部である。自分から持ち出した話題に応じてくれた相手の発話に対し「そうなんだ」を用いており、やや不自然さが感じられる。

例5)(JH1)

015JC：だから オッパも 早く 大阪弁を 習わないと。

016JH1：さ 今日から (JC：大阪 講座{笑い}) 大阪 大阪弁 ひとつま
毎日 一言。

017JC：{笑いながら} 毎日 一言。

018JH1：あ、そうか、そうなんだ。

JHは全談話を通してノダ単独付加文のCタイプを13例用いているが、そのうち8例が「そうなんだ」の形で用いられており、チャンク的な形での使用が目立つ。それは、終助詞の習得においてチャンク的な形から使用が始まるといったSawyer(1992)の指摘が学習者のノダの習得にも当てはまる可能性

をうかがわせる。

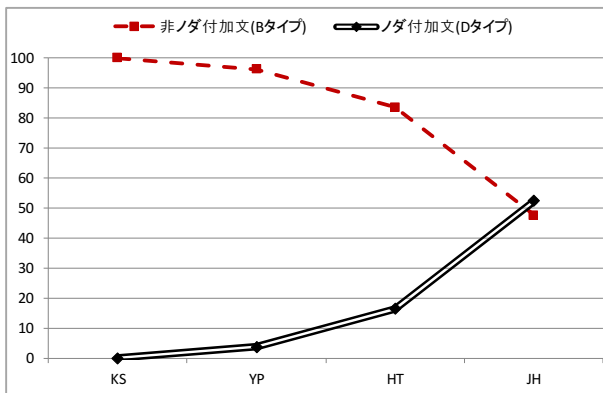
ここで、さらにノダと終助詞の関わりについて検討する。表5は終助詞付加文に限って、ノダがともに用いられている文のDタイプの実数と比率を表したものである。

〈表5〉 終助詞付加文におけるノダの使用実態

	KS	YP	HT	JH
ネ	-	- / 2	- / 1	- / 1
ヨ	- / 2	1 / 24 (4.2%)	11 / 65 (16.9%)	11 / 20 (55.0%)
ヨネ	-	-	- / 1	-
合計	- / 2(0%)	1 / 26 (3.8%)	11 / 67 (16.4%)	11 / 21 (52.4%)

*各話者別に「ノダと終助詞付加文の数/終助詞付加文の数(比率)」の形で、Dタイプの実数と比率を表している。

なお、図2に終助詞付加文に限って、非ノダ付加文(Bタイプ)とノダ付加文(Dタイプ)の使用率をグラフに表す。



〈図2〉 終助詞付加文におけるノダの使用率

表5と図2によれば、日本語運用能力が高くなるにつれ終助詞がノダと共に起しやすくなることが認められる。これは緩やかではあるものの、丁寧体

のKYコーパスでの分析結果と一致する。次の例6はHTの談話の一部であるが、過去形のすべてにンダヨが付いていることが見て取れる。

例6(HT1)

521HT1: 九月から ずっと 行く《来る》 前に 家で ケイム《ゲーム》
つと《ずっと》 したんだよ。【中略】

585HT1: あの そうから それで あの koshiweonという 場所が あるから、(JC: はい あ ありますね) 知ってるでしょ?

586JC: うん

587HT1: そう sinseoltongという 場所-に 行って、(JC: はい) ここに(JC: はい) その人 あの このkoshiweonという 場所で↑(JC: はい)
会ったんだよ。

588JC: そこで ど どういうふうに 会ったんですか?。

589HT1: [舌を打つ]だいてい はっつ に あの- その場所の 主人が スピン スピンという 人が 韓国語 できないから、(JC: あ-) たぶん あの がいごっこ《外国語》 勉強している 人を(JC: あ-) 紹介したんだよ。

HTの3回の収録談話に用いられたノダと終助詞付加文(Dタイプ)の数は計11例になるが、そのすべてが「動詞述語文の過去形+ンダヨ」の形をとっている。さらに、JHもノダと終助詞付加文(Dタイプ)を全部で11例用いているが、そのうち9例が動詞述語文であり、さらにそのうちの8例が過去形である。すなわち、JHの談話からも「動詞述語文の過去形+ンダヨ」のセットで用いられている傾向が見られるのである。それは、丁寧体の話しことばのKYコーパスでも確認されたものであり、話しことばにおいて「動詞の過去形」のように活用が難しくなる環境で、学習者が形態的手続きの複雑なマス形式を回避し、咄嗟に文を完結させる方略としてノダを活用している可能性を示唆する⁷⁾。

7) 学習者の書きことばではノダと動詞述語文との親和性が見られなかった(梁乃允・李吉鎔2018)。梁乃允・李吉鎔(2018)によれば、書きことばの作文対訳DBではどの述語文においてもAタイプの使用率が高く、Dタイプは名詞述語文で7.5%、動詞述語文で4.4%であった。ここから学習者が書きことばより話しことばにおいてノダを戦略的に

3.2 ノダ使用上の特徴

ここでは、丁寧体のKYコーパスで確認された学習者のノダ使用上の固有の特徴が普通体のSSコーパスにおいても現れるのかを検討する。まず、丁寧体ではノダが他のモダリティー表現より早期に習得され多用されることが見受けられるが、普通体ではどうだろうか。表6は、SSコーパスにおけるノダとノダ以外のモダリティー表現の使用実態を実数と比率で表したものである。

〈表6〉 学習者のモダリティー表現の使用実態

	KS		YP		HT		JH		全体平均	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
ノダ	1	0.6%	2	0.9%	14	3.7%	24	33.8%	41	4.8%
カモシレナイ	-	-	1	0.4%	8	2.1%	2	2.8%	11	1.3%
ソウダ(様態)	-	-	1	0.4%	1	0.3%	-	-	2	0.2%
ナケレバナラナイ	-	-	1	-	-	-	-	-	1	0.1%
ミタイダ	-	-	2	0.9%	2	0.5%	3	4.2%	7	0.8%
ラシイ	-	-	1	0.4%	1	0.3%	-	-	2	0.2%
総発話数	175		230		381		71		857	

表6からは、次のようなことが分かる。

- (1)KSはノダが1例用いられているのみでモダリティー表現の使用がほとんどない。YPもノダ以外にもモダリティー表現が出現しているが、ノダとノダ以外のモダリティー表現の使用において多寡の差異は見られない。
- (2)HTは僅差ではあるものの、他のモダリティー表現よりノダの使用が多い。そして、JHになると他のモダリティー表現よりノダの使用が際立つ。

このように普通体の話しことばにおいてノダが他のモダリティー表現に比べて多く用いられている。しかし、全レベルの平均で見るとノダの使用率は4.8%であり、KYコーパスでの結果に比べればノダが他のモダリティー表現より際立って優勢に用いられているとは思われない⁸⁾。次の例7

利用している可能性がうかがえると言える。

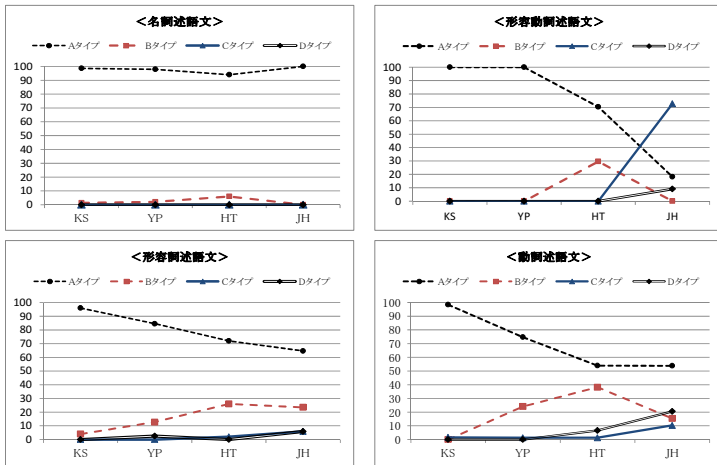
- 8) 話しことばのKYコーパスでは全レベル平均でノダの使用率が24.1%であり、他のモダ

は、ミタイダを用いているJHの談話例である。

例7)(JH1)

278JH1 : なんとか その ファッションとか おしゃれに、費やす そういう
 お金 自体(JC : うん)俺には やっぱり、なん なん なんていうか
 むだな こと やってるみたい。

次に、KYコーパスで確認された「名詞述語文は終助詞と、動詞述語文はノダと親和性が認められる⁹⁾」という特徴について検討する。図3に名詞・形容動詞・形容詞・動詞述語文別にA・B・C・Dタイプの類型がどれくらい用いられているのかを表す。



〈図3〉 述語文類型別の使用実態

リティー表現はもっとも用いられているワケでも0.3%にすぎない(梁乃允・李吉鎔2018)。

- 9) 名詞述語文と終助詞との親和性が認められることについては、教育現場における導入の順序や活用の簡易さなどの理由が指摘されている(李吉鎔2016)。一方、動詞述語文とノダとの親和性については、学習者は活用が難しくなる丁寧体の動詞述語文において形態的な手続きの複雑なマス形式を回避し、普通形に機械的にインデスをつけるといった簡略化が考えられている(李吉鎔2016、李吉鎔・梁乃允2016など)。

SSコーパスの場合、名詞述語文では学習者のレベルに関係なく、Aタイプがほとんどを占めており、KYコーパスのような終助詞付加文との親和性は見られない。形容動詞述語文においてはJHだけがノダ文を多用していることが見て取れるが、それはJHが『そうなんだ』をチャンク的な形で頻繁に用いるためと考えられる。一方、形容動詞述語文と動詞述語文ではHTとJHへと日本語運用能力が上がるにつれてAタイプ(言い切り文)の使用率が減ってはいるものの、他の類型に比べて最も優勢に用いられている。動詞述語文においてノダ付加文が少し伸びてはいるが、KYコーパスのようにノダとの親和性が認められるほど用いられてはいない。

4. 日本語母語話者の普通体におけるノダの使用実態

以上、韓国人学習者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態について考察してきた。そこで、学習者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態が日本語母語話者と比べてどうなのかを確かめるため、日本語母語話者(YA)の普通体の話しことばをベースラインデータとして用いてノダの使用実態について検討を行う。まず、表7に日本語母語話者(YA)における述語文の類型別使用実態を表す。

<表7> 母語話者の述語文の類型別の使用実態

	YA	
	実数	比率
Aタイプ	101	39.3
Bタイプ	116	45.1
Cタイプ	19	7.4
Dタイプ	21	8.2
合計	257	

*「合計」は総発話数を表し、「比率」は総発話数に占める各タイプ別の比率を表す。

学習者のSSコーパスにおける述語文の類型別の使用実態を示した、前掲の表4と比較しながら表7を検討すると、次のようなことが分かる。

- (1)まず、日本語母語話者は終助詞単独付加文のBタイプの使用が45.1%と最も優勢に用いられている反面、学習者の場合には全体平均でも10.9%と、日本語母語話者の約1/4にすぎない。終助詞単独付加文の使用が最も多いHTでも日本語母語話者の約1/3の使用水準である。
- (2)ノダ付加文(Cタイプ+Dタイプ)の場合には、日本語母語話者はその使用率が15.6%と学習者平均の4.8%より約3.3倍ほど多く用いている。
- (3)ところが、学習者のうちノダの使用の多いJHと日本語母語話者の使用実態を比べてみると、JHのノダ付加文の使用率が33.8%と日本語母語話者の15.6%より倍以上用いている。

(1)については、学習者の終助詞単独付加文の使用の少なさが指摘できよう。日本語母語話者とのコミュニケーションという側面から考えると、日本語母語話者において日常的に頻繁に使われ、聞き手への伝達態度を表す終助詞の未使用や不適切な使用は円滑なコミュニケーションを営む上で妨げになりかねない¹⁰⁾。

(2)によれば、普通体の話しことばにおいて学習者は日本語母語話者よりノダの使用が少ないことがわかる。ところが、(3)の通りに日本語運用能力が日本語母語話者に最も近いJH(33.8%)の場合では、学習者のほうが日本語母語話者よりノダを多く用いていることになる。これは、普通体の話しことばにおいて日本語運用能力の高い学習者の場合はノダを過剰使用する可能性を示唆するのかもしれない。しかし、学習者の丁寧体のKYコーパスの分析で学習者のノダの使用には個人差が見られることがわかった¹¹⁾。そのため、

10) 日本語では終助詞が述語形式の一部として頻繁に用いられており、話しことばにおいてはほとんど義務的に使用されている(井出・櫻井1997)。ところがナズキアン(2005)によると、日本語を学ぶ初級の学習者は終助詞なしの応答が多く見られるとし、そのような応答は母語話者にぶっきらぼうに聞こえる恐れがあるため、適切に使用できるよう授業で指導する必要があるという。

11) KYコーパスの韓国語母語話者の上級と超級レベルの15名のうち、ノダ付加文の使用率が50%を越えるヘビーユーザーの学習者が5人もいる一方、ノダを全く使わないと

JHのノダの使用が多いことも個人の特有な使い方であって、学習者の全体傾向とは違う可能性も十分考えられる¹²⁾。普通体における学習者のノダの使用実態の全体像をより正確に把握するためには、結果の信頼性が保証できるほどの数のデータの分析が求められよう。今後の課題としたい。

最後に、日本語母語話者の普通体におけるノダとノダ以外のモダリティー表現の出現頻度について、学習者の場合と比較しながら考察を行う。表8に日本語母語話者の普通体に用いられた、ノダをはじめとするモダリティー表現の使用実態を示す。

<表8> 母語話者のモダリティー表現の使用実態

	YA	
	実数	比率
ノダ	40	15.6
カモシレナイ	5	1.9
ソウダ(様態)	5	1.9
ナケレバナラナイ	2	0.8
ミタイダ	-	-
ラシイ	1	0.4
総発話数	257	

日本語母語話者の場合、ノダの使用率は15.6%である反面、他のモダリティー表現は最も多く出現するカモシレナイやソウダ(様態)でも1.9%とノダの約1/8にすぎないなど、ノダが他のモダリティー表現に比べて優勢に用いられていることが分かる。これは、学習者の普通体ではノダと他のモダリティー表現の使用率にそれほど開きがなかったこと(前掲の表6を参照)と対比できる。このことから普通体の話しことばにおいて学習者のノダの使用が少ないことが裏付けられるといえよう。

いう「非用」の学習者も2人いるなど、ノダ使用率における学習者の個人差が明らかになった(梁乃允・李吉鎔2016)。

12) 前述した通りにJHのノダの使い方を見ると「そうなんだ」を口癖のように使っており、過剰使用の可能性がうかがえる。

5. おわりに

以上、SSコーパスを用いて韓国人学習者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態について分析を行い、韓国人学習者の丁寧体の話しことばにおけるノダの使用実態および日本語母語話者の普通体の話しことばにおけるノダの使用実態と、それぞれ比較しながら考察してきた。その結果をまとめると、次のようである。

- (1)韓国人学習者は丁寧体の話しことばより普通体の話しことばにおいてノダの使用率が顕著に少ない。さらに、ベースラインデータとなる日本語母語話者に比べても少ない。
- (2)韓国人学習者は丁寧体の話しことばでも普通体の話しことばでも他のモダリティー表現に比べてノダを多用しているが、そうした傾向は丁寧体の話しことばにおいてより顕著である。
- (3)丁寧体の話しことばではノダと動詞述語文との親和性が認められるが、普通体の話しことばではそういった傾向は見られない。

このように、韓国人学習者は同じ話しことばでも普通体より丁寧体においてノダを優勢に用いることが明らかになった。そして、丁寧体の話しことばで確認された、韓国人学習者のノダ使用上の特徴が、普通体の話しことばにおいてはあまり目立たないことも分かった。韓国人学習者は丁寧体の使用が要求されるフォーマルな場面で、丁寧な形を形成する手続きを簡略化するために、「普通形+ンデス」という形を戦略的に取り入れているものと推測される。

<参考文献>

- 庵功雄(2013)『『のだ』の教え方に関する一試案』『言語文化』50 一橋大学語学研究室 pp.3-15
- 李吉鎔(2005)『日本語学習者におけるスタイル切換え能力の発達—韓国語母語話者を対象として—』BookPark(博士学位論文) pp.1-265

- _____ (2008) 『韓国学習者の日本語社会言語能力の習得メカニズム—丁寧形式と普通形式の切換えの場合—』『日本學報』75 韓国日本學會 pp.49-62
- _____ (2010) 『韓国入日本語学習者の丁寧体と普通体の習得に関する一考察』『日本學報』85 韓国日本學會 pp.29-46
- _____ (2016) 『韓国入学習者の日本語文末表現の習得に関する一考察』『日本學報』106 韓国日本學會 pp.129-144
- 井出祥子・櫻井千佳子(1997) 『視点とモダリティの言語行動』田窪行則(編) 『視点と言語行動』くろしお出版 pp.119-153
- 鎌田修(2006) 『KYコーパスと日本語教育研究』『日本語教育』130 日本語教育学会 pp.42-51
- 坂井美恵子(2008) 『英語母語話者の『のだ』の習得研究—データの分析』『九州地区国立大学論文集』創刊号 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポトリ部会 pp.1-14
- 迫田久美子(2012) 『非母語話者の日本語コミュニケーションの工夫』野田尚史(編) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 pp.105-124
- 佐々木陽子(1998) 『日本語学習者による『んです』文の使用に対する判断について』『福岡YWCA日本語教育論文集』8 福岡YWCA日本語教育論文集編集委員会 pp.73-86
- 谷守正寛(1996) 『日本語上級習得者言語に見られる特徴』『日本学報』15 大阪大学文学部日本学研究室 pp.123-140
- 趙萍(2008) 『中国人日本語学習者における『のだ』『のか』の習得—使用条件と非使用条件をめぐる—』『日本語教育』137 日本語教育学会 pp.11-20
- 趙萍・玉岡賀津雄・木山幸子(2009) 『中国人日本語学習者による『のだ』『のか』の使用条件・非使用条件の習得と日本語能力との因果関係』2009年度日本語教育学会春季大会 研究発表予稿集 pp.103-108
- 塚原真紀(1998) 『日本語学習者の会話における『ノダ/ンデス』の使用実態に関する一考察』『筑波応用言語学研究』5 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース pp.71-84
- ナズキアン富美子(2005) 『終助詞『よ』『ね』と日本語教育』『言語教育の新展開—牧野成一教授古稀記念論集』8 ひつじ書房 pp.71-92
- 野田尚史(2001) 『文法項目の難易度』野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(著) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店 pp.101-120
- 野田春美(1997) 『『の(た)』の機能』くろしお出版 pp.1-273
- 藤城浩子(2010) 『ノダの提示方法に関する一案—メタファを用いた意味・機能提示』『日本語/日本語教育』1 日本語/日本語教育研究会 pp.67-84
- 宮内桂子(2012) 『KYコーパスに現れた韓国入日本語学習者のノダの使用について』『日本語教育研究』24 韓国日語教育學會 pp.227-242
- _____ (2015) 『丁寧体の談話における『のだ』の使用実態—日本語母語話者と韓国入日本語学習者の使用を中心に—』『日本語学研究』46 韓国日本語學會 pp.17-37
- 梁乃允・李吉銘(2016) 『韓国語・英語・中国語母語話者の日本語文末表現の習得様相

- ーノダ形式と終助詞を中心に」『日本研究』70 韓國外國語大學校日本研究所 pp.237-256
- _____ (2017) 「KYコーバスの学習者談話における終助詞とノダ形式」『日本語學研究』53 韓國日本語學會 pp.57-73
- _____ (2018) 「日本語學習者の書きことばにおけるノダ一話しことばとの比較を通じて」『日本語教育研究』43 韓國日語教育學會 pp.153-170
- 若生正和(2010) 「韓國人日本語學習者の誤用分析」『大阪教育大學紀要第 I 部門』59-1 大阪教育大學 pp.109-119
- _____ (2011) 「『んです』が多いんです：韓國人日本語學習者の文末丁寧表現の考察」『大阪教育大學紀要 第 I 部門』59-2 大阪教育大學 pp.129-139
- Breiner-Sanders, K.E, Lowe, P. Jr., Miles, J., & Swender, E(2000) ACTFL proficiency guidelines-speaking: Revised 1999. *Foreign Language Annals*, 33(1), pp.13-18
- Sawyer, M.(1992) The development of pragmatics in Japanese as a second language: The sentence-final particle ne. Gabriele Kasper (ed.) *Pragmatics of Japanese as native language and target language*. Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii at Mānoa, pp.238-254

접 수 일: 2019년 6월 29일

심사완료: 2019년 7월 28일

게재결정: 2019년 7월 30일

<Abstract>

***Noda* in casual conversations of Korean-speaking learners of Japanese**

—A comparison with *noda* in formal conversations—

In the current study, we focus on the actual use of *noda* in casual conversations with the plain form of Korean-speaking learners. Further, this study compares and analyzes the use of *noda* pronounced in casual conversations by Korean-speaking learners, using formal conversations of Korean-speaking learners and casual conversations of Japanese native speakers. The results are summarized as follows:

(1) Korean-speaking learners use *noda* more frequently in formal conversations than in casual conversations. Korean-speaking learners use *noda* less frequently than do Japanese native speakers in casual conversations.

(2) Korean-speaking learners use *noda* much more often than other modality expressions both in casual and formal conversations. However, this tendency is more pronounced in formal conversations.

(3) The affinity between *noda* and verbal predicates is found in polite conversations but not in casual conversations.

Hence, *noda* in Korean-speaking learners has been found to be used in formal conversations much more frequently than in casual conversations. Additionally, the characteristics of the use of *noda* in polite conversations are not found in casual conversations. With regard to the recognition of the frequent use of *noda* in formal conversations, learners may tend to avoid using the morphologically complex *-masu* type in difficult verbal predicates in the polite form system and instead use the simplified form of mechanically suffixing *n-desu* onto the plain form.